
第一三話

酒顛童子退活事 中

『前太平記』上 卷第廿 三九八頁から四〇九頁より

[童子、頼光主従を召す]

こうして使いの男が、例の注進状を出し、大江山の合戦のことを詳しく話したところ、眷属がすぐに受け取って、童子の前に出てこうこうと申し上げる。ちょうどその時童子は、いつものように酒盛りをしていたが、例の注進状を開いて見て、「合戦が二十四日の早朝から始まったとすると、今日の注進が、遅く参上することが分からない。使いの下郎をお連れしろ」と言って、呼び出して事の次第を聞く。その男謹んで、「城を出発しますのは、昨晚の戌の刻でございましたが、道中で伯耆へ行く山伏で、道に迷っている者に遭遇し、不憫に思われたため、道の途中までお連れしましたわけで、不本意で遅く参上つかまつります」。童子は、「その客僧はどこにいるか」。「門外でございます」。「それをお連れしろ」。謹んで承って退出し、皆さんを案内する。「ああ、一生の危機は今であろう。たとえどんな悪霊鬼神であっても、帝の命令に神の威力を備え、それぞれの武具をもってこれを倒すのに、よもやしくじることあるまい」と、キッと心に便りを思って、その場に直面してご覧になるのが、これこそ噂の酒顛だなあと思われて、座っている身の丈で

居長にては

は六尺ほどもあるだろうか、腰は十圍余りにも見え、髪は禿で、振り分け髪の間か

六尺計りも有らんか、腰は十圍にも余りて見へ、頭は禿にして、振り分け髪の間よりも、

らも、日月のように左右の目が光り続け、顔の色は朱をかけたかのように、眉は漆

日月の如く左右の眼光り渡り、面の色は朱を洒ぎたるが如くなるに、眉は漆にて

で何回も色を塗っているかのように、左右の腕は新しい松を曲げているかのように

百入塗つたる如く、左右の腕は荒木の松を撓めし様なるが、

あるが、左には大きな杯を持ち、右には生々しい猿の片足を掴み座っていたのは、

左には大盃を持ち、右に生しき猿の片股を捕って居たりしは、

欲界の六天の魔王^(老)や、摩醯首羅^(貳)の変化といっても、何かこれに違いあるか。

欲界六天の魔王、摩醯首羅（漢字変換困難）の所変と云ふ共、何か是に加ふべき。

その他の、並び座っている眷属七、八人は、どれも異類奇形の曲者である。け

れども皆さんは、少しも気後れした様子もなく、先導が上座に着くと、全員年齢

され共人々、些とも臆したる気色もなく、先達上に着けば、皆年

の前後に沿って一方にきちんと並んで座った。

先後に随つて一面にしかと並み居たり。

【童子一行に子細を問う】

その時童子が、「貴方方はどこからの客僧で、何のためにここに来られたのか」。保昌は揉み手をして、「これは都方の山伏であるが、伯耆の大山へ初めて

保昌手を拱いて、

参詣しますが、思いがけないことに道に迷い、進退を失ったところに、考えられないほど思いやりがある人に参り会い、ここまで同行させてもらいました。出来ることなら慈悲の心をお示しくださり、一晚の宿を貸し、一日の飢えを助けてくださいよ」申し上げた。童子は聞いて、「お坊さんは先導と見成したが、本当の道には先

「和僧は先達とこそ見成しつるに、真の道には導き給はで、

導なさらないで、道に迷ったとは全く分からない。どういうわけがあるのだろ

道踏み迷ひしとは更に意得ず。

何様子細ぞ有らん」

う」。保昌は、「いやいや、そのようにおっしゃらないでください。山や川、宿

「いやいや、

さな仰せ候ひそ。

駅・道の地形を知っているのを先導とは申しません。仏道修行を重ねていることに

山川駅路の境を知りたるを先達とは申し侍らず。

行法勤修を積めるを以て

よって先導と申すのである。今回始めてこの山を通るといって、朝廷の従者に道を

先達とは申すなれ。

今度初めて此山を通るとて、

公の従者に道を問ふ。

聞く。これはお釈迦様がまだお名前を妙舎利仙人と申し上げた時、バラモンの僧に

是ぞ、大聖釈迦牟尼仏未だ御名妙舎利仙人と申せし時、

鞞羅梵志に

お会い申し上げ、三業^(参)・九品^(肆)の修行をしようと、雪山にお上りになったが、

逢ひ奉り、

三業九品の勤行せんと

雪山に上り給ひしに、

時折冷たい風が身を苦しめ、降る雪は道を隠したので、行くべき方角がなくなり気

時節寒嵐身を苦しめ、

が抜けていらっしやったところ、どこからともなく天童子が現れて、『気の毒な有様だなあ。私の行き先を導きにして来なさい』と先に立ち、神体にお連れ申し上げ

宝台に具し奉り、

げ、終わりに三密^(伍)の修行をお修めになる。また、孔子が渡し場に迷い、長沮・桀

遂に三密行を修し給ふ。

又、

孔子津に迷ひ、

長沮・

桀^(陸)に問われたのも、どこか今のことと違うか、いや、違わない」。童子は承諾

桀溺に問はれしも、

豈今に異なるや」。

童子諾して、

して、「貴方たちが本当に仏僧であるならば、どうして鬢髪を剃らず、法服を着な

「汝等誠に釈氏の徒たらば、

何ぞ鬢髪を剃らず、法衣を着せざるや。

いのか。その上に刀を横に差し、異様な姿で身をやつすことは、何の根拠がある

剃へ刀剣を横たえ、

異体の形を用る事、

何の拠かある」。

か」。頼光は聞き終えなさらぬで、「そもそも、我らの元祖役行者と申し上げる

頼光聞きも敢へ給はず、

のは、それより前の時代の和国の葛上郡茅原村の賀茂氏の男性である。三歳で父と死に別れになり、七歳になりなされるまでは母の恩恵で大人となり、孝行な心持は

母の御恵みにて長り、 至孝の志浅からず、

浅くなく、仏道修行の思いが熱心である。五色の兔^(漆)に付いて行って、葛城山の

仏道修行の思ひ苦ろなり。 五色の兔に随つて、 葛城山の

頂上に上り、藤衣に身を覆い、松の緑で生命を保ち、勤行なすること三十年余り。

頂に上り、 藤の衣に身を隠し、 松の緑に命の継ぎて、 勤め学び給ふ事三十余年。

生涯不犯の聖僧である。ただ、頭に一つの烏帽子をかぶり、最後に破れなくしてし

一生不犯の聖なり。 唯 一頭の烏帽子を着し、 終に破れ失せてげれば、

まったところ、大童になって修行をしていたから、その流れを汲む者は、姿は優婆

大童に成りて修行ありし故、 其流れを汲む者、 形は

塞^(捌)となり、頭に五仏宝冠^(政)をのせ、十二因縁^(拾)の折り目を置き、金剛界曼荼羅

優婆塞と成り、 頭に五智の宝冠を戴き、 十二因縁の髻を据へ、

(拾壹)の篠懸け^(拾貳)に、胎藏界^(拾參)の黒色の脚巾をはき、悪魔降伏の鋭利な劍（仏

九会曼荼羅の篠懸に、 胎藏黒色の脚巾をはき、 降魔の利劍を横たへ、

智）を横に差し、外には怒りの姿を現すととっても、内には忍辱の心を主とする。

外には忿怒の相を現すと雖も、 内には忍辱の心を宗とす。

だから不動明王・愛染明王、四天^(拾肆)・二王^(拾伍)、皆降伏の矛を手に持ち、いつも
されば 不動 ・ 愛染、 四天 ・ 二天、 皆降伏の鉾を攜え、 常に
仏法を守護なさっている」。

護法し給へり」

[童子一行を饗応す]

童子は少し頷き、「肉を食べることや飲酒は慎まないのか」。保昌は答えて、
「いえいえ慎むことでもなく、好むことでもなく、ある時は禁じある時はただ

或禁或与、

く。全てこれは仏の場合によつての許しと禁である。人がいて物を与えるならば何
皆是仏教の開遮なり。

を選ぶことがあるだろうか。人の心を壊すのは破戒に同じ。飲酒、これは本当の罪
ではなく、ただ罪の原因である。人は酒を飲むときは、確かによくない門を開く。
だからこれを禁止する。昔、祇陀太子^(拾陸)が、仏に申し上げて言うことには、『私
は昔、如来からの五戒^(拾漆)を守っている。今になって戻し投げようと思う。理由を
今に至りては還し捨てんと欲す。

なぜかという、五戒の中に飲酒戒があり、非常に維持しがたい。罪を身に受ける
所以何んとなれば、 五戒の中に飲酒戒あり 甚だ持ち難し。 罪を得ん事を

ことが怖いからである』。その時にお釈迦様がおっしゃることには、『貴方が酒を
恐るればなり。』

飲んでどんな悪事を働くのか』。太子がお答え申し上げて言うことには、『私は酒
を手に入れると戒律を心にとめて思う。また乱暴な心はない。これだから酒を飲む

又放逸の心なし。

と必ずしも悪心を起こさない』と。仏がおっしゃることには、『よきかなよきか

善哉善哉。

な。貴方は今もう悟りを開き真理に達する手段を手に入れている。もしも世の中の

汝今已に智慧方便を得たり。

若し世間の人、

人が、うまく貴方のようにするならば、命が終わるまで酒を飲んでも、どんな悪い

能く汝が如くせば

身を終ふるまで酒を飲むとも、何の悪か有らん。

ことがあるだろうか。もしも人が酒を飲んで悪事を行わず、喜びの心を理由に煩惱

若し人酒を飲んで悪を作さず、 歓喜の心の故に煩惱を生ぜず、

を生まないならば、善行が理由で善行の結果を身に受ける』と仰って、仏様は太子

善因の故に善果を得る』

に飲酒をお許しになった。肉を食すこともやはりそのとおりである。これを食べて
仏は身を飢えさせず、仏の教えの隆盛の基盤であるならば、どうして間違いがある

のだろう。同じようにその杯は、先導が申しただいて、ここにいる面々にもお与えになってやろうと思ってください。幸運なことに私たちの筧の中には、長旅の食

長途の儲けにとて、

事にとまって、少しの酒肴を蓄え持っています。差しさわりのないのならば召し

苦しからずは聞き食され候へ」

上がってください」と言って、それぞれの筧の中から色々なよい肴や珍しい食べ物を取り出して、座中に並べおいたところ、童子はたいそう喜んだ様子で、「それでは特段変わっている山伏たちではいらっしゃらなかったのだなあ。私は生まれつき

「さては子細無き山伏達にて坐しけるぞや。

吾天性

変わった姿であることに怖がられてなあ、自然と人との交流はない。私は酒を好ん

異相なるに恐れてや、

自づから人の交はり無し。

吾好んで酒を

で飲むといっても、いつも躊躇なく交わるのは鬼たちだけで特別な面白みがない。

飲むと云へども、

早晩も易はらぬ彼等計りにて異なる興なし。

思いがけなくこのようにお会い申し上げることも、そうなる運命であろう。今夜は

図らざるに斯く逢ひ進らす事も、

然るべき宿縁ならめ。

一緒に酒を飲んで、互いに憂さ晴らしが出来るのだ」と、持っている大きな杯を傾

今夜は共に酒汲んで、

互ひに憂さを晴るべきなり」

け、保昌の前に置き、「どうしたのかお前たち。客僧たちが知らない山道に迷って、とうとう腹を空かせていらっしゃるような姿が不敏なので、そら、何か差し上

飢へに及び給ふらんが痛はしければ、 其、何をがな進らせよ」

げろ」と言ったところ、眷属たちは席を立て、すぐに椀に盛った飯を担ぎ置いたところ、いっぱいにして並べてある飯・汁・おかず、全て鹿や猿の肉などを色々と

皆鹿猿の肉など様々に

扱い用意してもてなした。童子は微笑んで、「さあさあ掻き込んでください。私は

取り営みてぞ出だしける。

同じように皆さんのご馳走をいただいてしまおう」と言って、手元に寄せて食べ

我は又旁々の饗応に預かりなん」

て、「なんともまあ世間に、このような滋養のある食物があったのだなあ」と言ってこの味わいに引かれ、受け取り引き受け飲むくらいで、飲み干した杯の数も分からず、並び座っている者たちにもお与えになって、身分も関係なく飲んでしまっ

順逆をも撰ばず飲みてげり。

た。六人の人々は宴会で食べ終えて、「それではそのお杯は、先導がいただく」

と席を立て、童子の前にある大杯を取って傾け、並びに童子の前に置くと、童子は飲んで季武に差し出す。季武もいっぱい飲みつくして、また童子に返し、それから献酌して夜もすっかり更けてしまった。童子は奥に入ることも出来ず、その席に

酔って倒れて、前後不覚に高いいびき声をあげて寝入ったのだった。そのほかの仲間たちも全て泥酔し手、静かな場所に入って休んだほどで、皆さんは、「それ今だ」とお思いになったが、末席に座ってした曲者が、最初から酒も飲まないで、座中に目を配り、皆さんの様子を承知せず不審に思ったのだろうか、ひたすら用心し

一向要人の

ている様子で、奥の間を設け準備して、「皆さん、ここに泊まってください」と

体にて、奥の間を補理設けて、

言って引き連れて差し上げ、あいまの障子を固く閉じてしまった。

間の障子を固く閉ぢたり。

注釈

※壺・欲界の六天の魔王……「欲界」は衆生が生死流転する欲界・色界・無色界の三つの世界のうち、欲心の盛んな人間世界。「六天」はさらに「欲界」のうちの神々の住む領域。他化自在天・化樂天・兜率天・夜摩天・トウ利天・四王天を言い、「六天の魔王」はそのうちの他化自在天の魔王波旬のことか。

※貳・摩醯首羅……大自在天のこと。色界（欲望から離れた清浄な世界）の三千世界の主。

本文中では「欲界の六天の魔王や、摩醯首羅の変化といっても～～」と訳したが、「摩醯首羅」は（私も不勉強故理解が及んでいない部分もあるが）清浄な世界の神であり、作中で鬼と比べるべき存在ではない。調べたところ、「大自在天」は「他化自在天（第六天魔王の住む領域、もしくは第六天魔王そのものを指す）」と言葉が似ているためよく混同されてしまうらしい。そのため、もしかしたら「欲界の六天の魔王である摩醯首羅の変化といっても～～」という意味の文章であるかもしれない。

※参・三業……身業(身体的活動)・口業(言語活動)・意業(精神活動)のこと。

※肆・九品……極楽浄土に往生する者の生前の功德によって分けられる九等の階級。もしくは極楽浄土に往生するための九つの修行。

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

※伍・三密……仏の身・口・意のはたらきのこと。

※陸・長沮・桀溺……中国の隠者。渡し場に迷った孔子が尋ねた人物。（参考文献：井波律子訳・岡本厚発行『完訳 論語』2016年6月 岩波書店）

※陸・五色の兔……不詳。初出は『源平盛衰記』卷二十八「役行者の事」。

※捌・優婆塞……男子の仏教信者。

※玖・五仏宝冠……金剛界の大日如来が頭上にかぶる冠。冠の中には五智如来の化仏がいる。山伏の兜巾はこれをかたどるとされる。

※拾・十二因縁……衆生の苦しみの原因を12段階で説明したもの。無明・行・識・名色・六処・触・受・愛・取・有・生・老死の12。

※拾壹・金剛界曼荼羅……金剛界(大日如来を智慧の方面から説いた部門)を描いた曼荼羅。大日如来の悟りと智慧を象徴し、九つの領域に区分されることから九会曼荼羅ともいう。

※拾貳・篠懸け……修験者の衣の上の麻の衣。

※拾参・胎蔵界……大日如来を慈悲・真理から説いた部門。

※拾肆・四天……四方を守る護法神、四天王のことか。東の持国天、南の増長天、西の広目天、北の多聞天。

※拾伍・二王……仁王のことか。

※拾陸・祇陀太子……古代中インドにおいて、コーサラ国波斯匿王の王子。釈尊のために祇園精舎をたてた。

※拾漆・五戒……5種類の禁戒。不殺生・不偷盗・不邪淫・不妄語・不飲酒。

はい！酒吞童子のおでましです！

今回の話は仏教用語のオンパレードで注釈が大変です…突っ込みドコロがありましたらじゃんじゃん言って下さい。五色の兔は結局なんなんだ……

壹のページでは前時代の酒吞童子について触れましたが、基本的にどの作品にも共通しているのは酒吞童子の人間臭さですね。「嘘偽りなく」身分を明かす山伏たちに笑みを浮かべて宴を開く。酒吞童子の懐の深さと優しさを感じます。『前太平記』は他よりも頼光公に重きが置かれ、英雄の面が非常に大きいですが、やはり騙され殺される酒吞童子には憐憫の心がわいてきます。

感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitterやメール等でご連絡くださいm(__)m

公開：2017/7/24

改訂：2021/3

海熊童子